

## お茶の水女子大学地理学教室と外邦図との関わり

式 正英（お茶の水女子大学名誉教授）

### 1. 「お茶の水女子大学所蔵外邦図目録」について

この度、数年に亘る外邦図研究の成果の一部として「お茶の水女子大学所蔵 外邦図目録」（2007年1月）が刊行された。刊行に至るまでの経緯については同目録書の解説や改題において詳しく述べられている。外邦図とは戦時下の陸地測量部において調製された近隣諸国の範囲の地形図類であり、字義からは「外国の地図」に当てはめての用語と解されるが、同目録書によれば日本の地形図がかなりの数含まれている。しかもそれらには戦後に刊行された版が含まれ、戦後に編集された地図集が母体であることが判る。

これに関しては1970年、浅井辰郎教授の斡旋で資源科学研究所所蔵の「東半球縮尺図 16,000枚」<sup>1)</sup>を一括して購入した際、その中に含まれていた地図すべてを、原則的に今回其の俣目録化した事に原因があると思われる。当時はお茶大の地理学教室員は上記の一群の地図を「資源研の地図」と呼んで、折々拝見させて戴く程度であった。「東半球縮尺図」として資源研での呼称は、参謀本部から移動した地図の由来を曖昧にする意味があったであろうし、まして軍での呼称であった「外邦図」とは敢えて言うまいとする様な認識はあった。

お茶の水女子大学は戦後の1949年に発足した新制大学ではあるが、明治初年の1874年に創設された東京女子高等師範学校を引継いで建学されたので、明治大正と昭和戦前の遺産を其の俣継承した、歴史的伝統の上に建つ学校である。女高師時代には地理学教室として独立はしていなかったが、地歴科地理学の専任教授は着任していたので、地図類の整備も着々とすすめられて来ていた。地形図の製本されたものは、単行本と同様図書備品として扱われており、2万分の1地形図、5万分の1地形図、20万分の1地勢図等戦前版が数多く所蔵されて来た。その分はどうやら今回の目録には合わせて掲載されている様に思われる。

この「外邦図目録」には「資源研から購入した地



浅井辰郎先生（2003年11月）

図」を中心に、女高師時代に収集した地図、関係者から寄贈された地図を含む16,886図幅を収録したとある<sup>2)</sup>。併し筆者在籍中（1959～1992年の33年間）の記憶にある外邦図の中に、目録から洩れているものが他にもある様にも思われる。それは綴じられていない一枚々々の単葉の地図であり、消耗品扱いとされて来た類いである。

在籍当時、大学では一般的に地形図は、図書同様の扱いとして購入され、図書館の捺印を受けるが、資料として保存用となる以外の、調査研究用や学習作業用の地図は消耗品として扱われ、教官や学生個人の使用に供された。つまり単葉の地図は備品に登録されて保存されるものと作業用に使用され消耗品扱いになるものとの2種類に区別された。こうした扱いは地図利用に伴う宿命でもあったし、女高師からお茶大へ継承された地図の取扱いのルールでもあった。

その内の女高師時代の作業用地形図が約1,000枚程単葉の形で、地理学教室製図室の地図棚に保管されていた。主にかつて旧領域であった朝鮮半島であり、陸地測量部製の5万分の1地形図である。作業用と判断した根拠は、土地利用別の色分け作業途中の図や学生の名前が記された図が数10図葉も含まれていたからである。これらが今回の目録に収録されたか否かは、作業過程に携わっていない為明らかとは言えなかったが、当原稿執筆中（2007年11月上旬）に手にすることが出来た「お茶の水地理 第47

号」に掲載された宮澤 仁准教授らの論考<sup>3)</sup>によって、この分が含まれていることが明白になった。尚今回の外邦図目録中にある日本の地形図などを除いた本来の外邦図の総計は12,909図幅とされた。更に製図室地図棚に保管されていた単葉の地図の外邦図は合計1,276枚、内朝鮮半島分は665枚の現存することが、宮澤准教授の調査によりこの度明らかにされた<sup>4)</sup>。

## 2. お茶の水女子大学の外邦図と浅井辰郎教授の着任

歴史の古い学校には思い掛けない所に資料が寝かされていることがある。昭和60(1985)年、当時地理学科主任の井内 昇教授から附属高校の桜井孝行教頭宛に出された文書<sup>5)</sup>によると、大陸地形図(朝鮮、満州)2.5万分の1、5万分の1、10万分の1の計338枚と海図70枚の寄贈を受けたとする内容であった。この文書は高校(又は個人)から大学への寄贈に関する確認と礼状なのであるが、備品の所管換えではなく、消耗品的扱いの物品資料の委譲と思われる。これらの地図が地理学教室の中で、その後どのように保管処理されたかは筆者の記憶には定かではないが、「資源研の地図」とは異なったルートで、外邦図が教室内にある程度の量蓄積されて来た別の事例となろう。

お茶の水女子大学は1975年以降から現在は博士課程が設置された大学院大学となっているが、1949年新制大学として発足してから暫くは学科目制3学部の小規模大学であった。1963年以降学部ごとに研究科(修士課程)を設置する機運が生じ、1966年には人文科学研究科ができて、全学が修士課程を持つ講座制大学へと移行した。地理学科においても翌昭和42(1967)年4月、浅井辰郎教授をお迎えして陣容を整えることになった。即ち人文地理学、自然地理学の2学科目制から人文地理学、自然地理学、地誌学の3講座制となった。人文地理学講座は松井 勇教授・正井泰夫助教授、自然地理学講座は浅井辰郎教授、浅海重夫助教授、地誌学講座は渡辺 光教授・式 正英助教授、貝山久子助手で構成された。

浅井辰郎教授は気候学を専門とされる既に著名な地理学者で法政大学教授であられたが、渡辺教授か

らの徳憑もあって国立大学であるお茶の水女子大学に転出された。浅井教授は京都大学地理学の御出身であり、大学卒業後、満洲の建国大学に赴任されたが、兵役に就かれ戦後2年間のシベリア抑留を体験された後帰国され、1947年12月直ちに資源科学研究所に勤務された。そこで外邦図(東半球大縮尺図)と出合い、その整理や管理を担当されることになった。法政大学に転出後も資源科学研究所研究員を兼務され、お茶の水女子大学に来られてからも、非常勤研究員を同研究所解散時の1971年3月まで兼務されていた。

昭和45(1970)年、財団法人資源科学研究所が解散される事がきまり、その所蔵する地図を処分したいとの意向が浅井教授を介してお茶大地理学教室にも伝えられて来た。丁度その時期の1970年3月、やや長期にわたり教室主任であられた渡辺 光教授が定年御退官を迎えられて、松井 勇教授が主任になられた。浅井教授は上述した関係から資源科学研究所の要請に応えるべく「東半球大縮尺図(「東半球詳細地図」とも表現される)」を、貴重資料の散逸を防ぐ為にお茶の水女子大学で購入するよう事務局に熱心に働きかけられた。

その努力の甲斐があつて、年間の大学の経常経費とは別枠の国の予算として、購入経費220万円を獲得できたことにより、この願いは解決された。文部省に折衝に当られた当事者は萬波 教氏(東大国文卒)であり、市古宙三文教育学部長(東洋史)、波多野完治学長(心理学)の時代である。国費による上記地図購入の成果は、当時折衝に当られた大学スタッフの理解と好意を得られたことが大きく働き、又戦中に開所された資源科学研究所は当初は文部省に所属していたと言う利点もあつたであろう。資源科学研究所としては解散に直面し職員の退職金の元資にあてる必要性があつたと浅井教授が説明されている<sup>6)</sup>。また同教授御自身は東半球大縮尺図を齎すことは、お茶大への「転勤土産」と意識されていた<sup>7)</sup>。

## 3. お茶の水女子大学での外邦図の管理

この様な経過を経て一括購入された「東半球大縮尺図」は、1971年1月お茶の水女子大学本館1階の

浅井研究室に搬入された。架台3基に吊り下げられた地図集の形であり、全部で191冊分あった。1972年3月、既に建築中であった文教育学部棟の新築完成に伴い、同年6月地理学教室は新学部棟7階に全部が移転し、上記地図は計測室(704室)に移された。又1970年度中に浅井教授の科学研究費によってM2型マイクロフィルム撮影機も購入された。この器材は建物移転後、新棟7階南西角の浅井研究室(701室)の中に設置された。この教室の移転の時期は、筆者にとっては偶々欧米での1年間の長期在外研究中にあたり、何の助力も出来ずに終わってしまい、申し訳なく思っている。

浅井辰郎教授のお茶大在籍中は、最も活発に「東半球大縮尺図」である外邦図を利用されていたと思われる。当該地図資料に関してはすべて浅井教授の管理下にあったので、他大学へのコピー供与の事例等について、他の教室員に知らされることはなかった様に思う。マイクロフィルム撮影機と外邦図のお茶大への購入を、殆んど同時に進められ首尾よく成功されたことには、かなり御満足の様子であった。御退官の折の述懐に、お茶大在勤中「欲しい器械や資料は大体叶えられた」<sup>8)</sup>と記されている。このたびの一連の外邦図研究ニューズレター等<sup>9)</sup>によって、浅井教授在勤当時の外邦図をめぐる他大学等との交流の詳細を、当時の教室員であった筆者も初めて知り得た次第である。つまり「東半球大縮尺図」に関しては、浅井教授在任中進んで御自身が管理にあたられており、教室会議等でも複製配布の一切の業務の報告はなされなかったと覚えている。

松井 勇教授は1973年3月定年退官され、浅井教授は1975年4月から1979年3月まで附属高校校長に併任せられて後、1980年3月に定年退官を迎えられた。1980年4月以降は「東半球大縮尺図」の管理、複写などは他の教室関連事項と同様、教室主任の主宰する教室会議事項として処理されることになり、図書・地図の整理や貸出し収納等の実務は定期的に助手が勤めてきた。

1981年6月、筆者が教室主任を担当している折、出版社の株式会社「学生社」より教室に接触があり、鶴岡正巳社長より教室所蔵地図の借用願が提出された。浅井教授退官後も東京都立大学東洋史研究室よ

り外邦図閲覧の希望があり、そうした要請や依頼にはなるべく応じていたが、その内コピーだけを目的とする貸出し要請があつて対応に苦慮した経過があつたかと記憶する。即ち備品としての貴重資料はそれなりに慎重に扱われて然るべきとの観点に立つ必要があつた。消耗品なら滅失しても致し方ないで済むが、備品となればそうした扱いでは済まない筈である。「東半球大縮尺図」は購入の経緯から貴重資料の備品であつた。

文献「琉球諸島地形図集成解題」(柏書房)に記載された浅井教授の所論によれば「第47、48冊は台湾、第49～55冊は朝鮮の各5万分1地形図で、これは1981(昭和56)年に学生社が復刻、出版した」とある<sup>10)</sup>。この記述は浅井教授が御退官後のことを想像で書かれたもので実情とは異なっている。上記の様に鶴岡社長よりの要請があり、これに対応する為に、主に消耗品扱いの女高師以来蓄積されて来た朝鮮の地形図を暫時貸与することにしたのである。

そもそも鶴岡氏は飯本信之名誉教授<sup>11)</sup>の御子息と同窓で同教授とも親しく、同氏よりの依頼は本学が外邦図を保持しているとの情報を得た上であつた。

「この度小社では朝鮮半島5万分の1地図集成の刊行企画にあたり、小社は原地図を各方面で蒐集し、全地域715図のうち425図を手に入れました。つきましては不足の290図について、貴地理学教室所蔵の同図を借用致したくお願い申し上げます」と必要な図幅を明示した索引図付きの文書で申し出られた。つまり学生社が独自に蒐集努力して来たが、不足分をお茶大の所蔵地図で補いたいが、借用させて貰えるであろうかとの問い合わせと依頼であつた。それに対し、教室側としては消耗品扱いの女高師伝来の該当の地形図を貸与し、それでも不足する10数枚を「東半球大縮尺図」からの貸与に応じたと覚えている。貴重備品である「東半球大縮尺図」を、できるだけ保護するために採った処置である。決して安易に朝鮮、台湾の地図集全体の貸出しに応じた事実は無いのである。御退官後も巨細を御報告できていたとすれば、より正確な御理解を戴けたのではないかと思うと、いささか残念な思いが残る。

小規模の教室に貴重資料が保管される場合、その円滑な利用に関しては問題が起りやすい。利用者が

純粋な学術的研究目的で訪れる場合には、いつもなるべく円滑に対応できて来たと思うし、利用者にも満足して頂けたと思う。大規模な貸出しや複写要請に応ずるのは殆んど困難と考えられる。利用意図も選別せざるを得ないことも起り得る。出版を意図した複製目的を含めて、たとえ研究用としても取り敢えずの大量の複製依頼には、資料の所在移転による資料価値低減の問題も起り得るから、諸種の事情が充分考慮され対応されてよい筈である。

所在情報の目録化は貴重資料利用への道を開く第一歩である。研究教育が大学の目的である以上、一般へのサービスは余力があれば応じられる範囲となるのは止むを得ない事柄であろう。関係者により地図資料のデータベース化等より利用し易い環境を構築する方向で模索推移することが望まれる。

## 注

- 1) 浅井辰郎(1972)：東半球大縮尺図のことも お茶の水地理 13号 pp. 48-49。  
浅井辰郎(1971)：プラスマイナスの当り年 お茶の水地理 12号 pp. 53-54。
- 2) 大浦瑞代、高槻幸枝、宮澤 仁(2007)：お茶の水女子大学所蔵の外邦図について 『お茶の水女子大学所蔵 外邦図目録』 pp. 3-4, お茶の水女子大学文教育学部地理学教室。
- 3) 宮澤 仁・高槻幸枝・大浦瑞代・田宮兵衛・水野 勲(2007)：お茶の水女子大学所蔵外邦図コレクションの全体像 お茶の水地理 47号 pp. 1-14。
- 4) 宮澤 仁准教授より筆者当てに送られた通信(2007年11月13日)による。同准教授の調査によると「韓国及び北朝鮮 665枚(内5万分1 599枚)、満洲・関東州 70枚、海図298枚、航空気象図87枚、等(以

下略)計1,276枚」の数字である。

- 5) 昭和60年3月31日、地理学科主任 井内 昇より桜井孝行宛てに発行された文書。「いずれも現在では手に入れにくい貴重なもので、教室としては保管に留意し、教育や研究に利用させて頂きたい」と記されている。「大陸地形図、朝鮮5万分の1 176枚、満洲 10万分の1 101枚、5万分の1 24枚、2万5千分の1 37枚、海図 日本総部及び付近諸海 70枚、合計408枚」の内容である。
- 6) 浅井辰郎(1999)：琉球諸島の地形図はどんな経緯でお茶の水女子大学に入ったか 『大正・昭和 琉球諸島地形図集成』 解題 pp. 23-26, 柏書房。
- 7) 上記浅井辰郎(1999)の所論中にもある。又『お茶の水女子大学所蔵 外邦図目録(2007)』に掲載の「浅井辰郎(2000)：資源科学研究所の地図の行方—多田文男先生の英断」の中にも記載がある。
- 8) 浅井辰郎(1980)：お茶大十三年、その感謝と希望 お茶の水地理 21号 pp. 3-4。
- 9) 久武哲也(2003)：旧資源科学研究所所蔵の外邦図と日本の大学・研究施設等所蔵の外邦図との系譜関係 外邦図研究ニューズレター No.1 pp. 15-20。  
小林 茂(2005)：「外邦図」へのアプローチ 地図情報 Vol.25 No.3 pp. 4~6。  
久武哲也(2005)：日本および海外の諸機関における外邦図の所在状況とその系譜関係 地図情報 Vol.25 No.3 pp. 7-11。
- 10) 注6)の文献のp.25にこの記載がある。
- 11) 飯本信之名誉教授(1895~1989)は東京女高師教授からお茶の水女子大学教授、初代文教育学部長を勤められ、地理学科の創設に当られた方である。